

# 守破創

対談

「なごり雪」「22才の別れ」などのヒット曲で知られるシンガーソングライターの伊勢正三氏。多くの人の心をつかむメロディーや詞はどのように生まれたのだろうか。「中学生の頃から正やんマニア」と語るほど熱狂的ファンの田村直樹審議委員と、世の中に伝わる言葉の選び方について語り合う。



日本銀行政策委員会 審議委員

## 田村直樹

TAMURA Naoki

1961年京都府生まれ。84年京都大学法学部卒業、同年、(株)住友銀行入行。2009年(株)三井住友銀行東武池袋ブロック部長、10年同銀行関連事業部長、12年同銀行執行役員投融資企画部長、14年同銀行執行役員(特命)、15年同銀行常務執行役員広報部・経営企画部・関連事業部副担当役員、17年同銀行常務執行役員リテール部門副責任役員、18年同銀行専務執行役員リテール部門統括責任役員、21年同銀行上席顧問に就任。22年7月より日本銀行政策委員会審議委員。

## 心の琴線に触れる曲を作り続ける 永遠のチャレンジャー



シンガーソングライター

## 伊勢正三

ISE Shozo

大分県津久見市生まれ。71年、大分県立大分舞鶴高等学校の先輩だった南こうせつと、山田パンダとともにフォークグループ「かぐや姫」を結成、「神田川」などのヒット曲で一世を風靡する。75年、大久保一久とフォークデュオ「風」を結成。80年、ソロとして武道館コンサート。代表曲に「なごり雪」「22才の別れ」「海岸通」「ささやかなこの人生」など多数。これまで8枚のアルバムでチャート1位を記録。楽曲の多くがさまざまなアーティストにカバーされている。デビュー50周年を迎えた今もソロのLIVE、CDリリース、楽曲制作、コンサートプロデュース、他のアーティストとのコラボレーション等、精力的に幅広く活動している。2022年、使用楽器や愛用品を展示した資料館「伊勢正三ミュージアム」[海風音楽庵 UMIKAZE ONGAKUAN]が大分県津久見市に開館。最新アルバム『STILL MORE』(2023年9月6日リリース)。

南こうせつ先輩の  
誘いに乗って  
大分から上京し、  
音楽活動に専念

**田村** 私は中学生の頃からずっと「正やんマニア」でして、もう50年くらいになります。就職面接のときにも、尊敬する人物を聞かれて、「伊勢正三さん」と答えたぐらいです。

早速ですが、これまでの音楽活動について伺います。伊勢さんは高校で南こうせつ(注1)さんと出会い、大学進学で上京された後にフォークグループ「かぐや姫」(注2)に参加されました。その際、音楽活動に専念するため、大学は中退されています。

**伊勢** 親からは九州の国立大学に進めと言われていたのですが、こうせつ先輩から「かぐや姫」に誘われていたため上京を決めました。本気で音楽をやる以上、大学に行かなくなるのが目に見えていたので、親に無駄な出費をさせないためにも中退しました。

**田村** ご両親から反対されなかったのですか。

**伊勢** 母は反対しなかったけれど、

保守的な考えの父からは、暗黙のプレッシャーがありましたね。

でも、少年時代はすごく自由に、伸び伸びと育ててくれました。以前、俳優の渡辺謙さんから「伊勢さんって中二病(注3)ですよ(笑)」と言われたんですが、感性が思春期のままという意味では、本当にそのとおりだな。今でも僕は、自分の原点は中学時代にあっただと思っています。

**田村** 私が正やんマニアになったのも、中学二年生のときです。「風」(注4)の最初のアルバムが出た頃で、そのときにギターを買ってもらって歌い始めました。

今でも高校時代の同級生と山小屋に行つて、夜中までギターを弾き、当時の唄、「ささやかなこの人生」なんかを歌いまくるのですが、その意味では、私も中二病ですね。**伊勢** 熱いですね。僕も初めてギターを持ったのは中二のときでした。その半年前に誕生日に買ってもらったウクレレで加山雄三さんの「お嫁においで」を覚えました。先日のコンサートでも演奏したのですが、指が自然に動いて驚きました。

**田村** 「かぐや姫」は「神田川」が

ヒットして間もなく解散し、「風」も人気絶頂の頃にソロ活動に移っています。音楽のジャンルもフォークから大人向けのロック的なものへと変わっていくのですが、伊勢さんは、守りに入らないというか、チャレンジし続けている印象があります。

**伊勢** 自分の習性なのでしょうね。特に「風」のときは、本当に好きなことをやろうと思っていました。実は、ファーストアルバムに「22才の別れ」は入っていません。オリコン一位になった曲をデビューアルバムに入れないというのは意識的に行いました。

**田村** 「22才の別れ」の力を借りずに売るんだ、と。

**伊勢** レコード会社から猛反対されたんですが、「これでどうですか」という感じで「海岸通」という曲を作りました。「風」はそういうグループだと示したかったんです。

**田村** 早くからシンセサイザーを取り入れるなど、そういった面でも先進的ですね。

**伊勢** アップル (Apple Inc.) のコンピュータが日本に初めて入ってきたとき、訳も分からずに買

ました。

僕は、曲のイメージをアレンジャーに分かってほしくて必ず自分のデモテープを作っていたのですが、例えばチェロを弾きたいなと思っても、すぐには習得できません。でも、コンピュータを使えばチェロの音を出せるかもしれない。簡単なプログラミングで自分ができることをやらせる方法を考えながら、コンピュータに没頭していったのです。

**田村** 最近ではAIが対話形式で応答してくれるチャットGPTが話題ですが、音楽においてもデジタル化の影響は大きいように思えます。

**伊勢** チャットGPTは出るべくして出たな、と思いましたね。というのも僕は昔、作詞マシーンを作ろうとしたことがあるのです。

メロディーが先にある、そこにはまる言葉を探しながら詞を書くのが僕のスタイルですが、どうしてもここにあと四文字足りないな、ということがあります。そういうときに、「四文字の言葉」と打てばランダムに言葉が出てくるようにコンピュータでプログラミングしました。

**田村** ということは、実はそのようにしてできた曲があるということでしょうか。

**伊勢** いや、それが一回もないんです。色と言葉を組み合わせて、「悲しい」はブルー、「より悲しい」は紫に近いブルーというような登録を考えたりしたのですが、あれこれ考えているうちに、「結局、人間の頭ほど優れたコンピュータはない」と気付いたのです。だから、作詞マシーンを作ってもしょうがないな、と。

**田村** 伊勢さんの詞は言葉の選び方、使い方を通じて、そのシーンや登場人物の心情などをとても鮮

(注1) 南こうせつ／一九四九年大分県出身のシンガーソングライター。代表曲に「神田川」「赤ちようちん」「妹」「夢一夜」など多数。

(注2) かぐや姫／一九七〇年に南こうせつを中心に結成されたフォークグループ。後にメンバーの変更があり、七一年に伊勢正三、山田パンダと再結成した。

(注3) 中二病／一九九九年にタレントの伊集院光がラジオ番組で使い始めた、思春期に特有の行動や言動などを一過性の病気に見立てた造語。

(注4) 風／一九七五年に結成された伊勢正三、大久保一久によるフォークデュオ。七九年に活動休止。

やかに伝えていきます。

**伊勢** 歌を作るモチベーションというのは、何か心が動いたときです。それで、これを映画にしてみようかと思うんです。それが僕の歌作りです。

まず、直感でメロディーがふと浮かぶ。僕はよく「降りてくる」と言っています。クラウド(注5)みたいなものがあつて、すでにそこに曲はできているんです。例えば「なごり雪」という歌が。

**田村** それを取り出すということでしょうか。

**伊勢** 自分がそのクラウドにつながれるかどうか。本当に真面目に取り組み、集中したときに、そこと通信できるという感じですよ。

そこには、誰かの心を打つ、良いものになる塊のようなものがあります。そこにアプローチできるかどうかが大事なんです。

## 造語だった「なごり雪」が半世紀を経て 国語辞典に載った

**田村** 「なごり雪」といえば、それまでの日本語にはなく、伊勢さんが作った言葉ですよ。

**伊勢** 僕が書きたかったのは、その季節の最後に降る雪、積もらなくて落ちては溶けるはかない雪のイメージです。それで、あえて「なごり雪」としたのですが、二〇一三年に日本気象協会の「三月のことば」に入れていただきました。それだけでも嬉しかったのに、今回、三省堂国語辞典の第八版に、正式に日本語として加えていただきました。その由来には「ミュージシャン・伊勢正三の造語」とまで書かれています。

**田村** 素晴らしいですね。われわれ日本銀行は金融政策という難しいことを分かりやすく伝えていかなければなりません。どいう言葉を使えば良いのかという悩みがあります。その点、伊勢さんの言葉の選び方は絶妙です。どのように工夫されているんでしょうか。

**伊勢** 過激な言葉を選んだ時代もありましたが、真意を伝えたい、という思いが強いです。二〇一九年に出したアルバム『Reborn』に収めた「俺たちの詩」は、完成するのに一〇年かかっています。自分の中にあつたテーマで、サビは

できていたけれども進まずにいたのが、ある日突然書けるようになりました。

**田村** そのアルバムの中の「小さな約束」という曲の一節にある「さよならするくらいなら 他には何もいらぬ」のようなストレートな詞も非常に印象深いです。昔のご経験ですか。

**伊勢** 「なごり雪」や「22才の別れ」なんかも本当にあつたことなのかとよく聞かれるのですが、はっきり言って全部作り話です。ただ、そのどこかに自分の経験が入ってくるんですね。ホームで別れて悲しかったよな、とか。そのモードをモチベーションにして、先ほど話したクラウドみたいなものになろうとするんです。そうすると、少なくともメロディーはすぐに作れます。

**田村** 歌詞のほうが大変ということですか。

**伊勢** 自分自身も納得した形で周りにもアピールできるような歌詞にするのは大変ですね。時間をかければ良いというものではなく、やはり集中力が大事だと思います。

## 自分の心の琴線に触れてから 世の中に伝えていく

**田村** これまでの音楽活動の中で、何度か休養のような期間を設けられています。その間に何をなさっていたのですか。

**伊勢** 個人的な趣味が多いです。フライフィッシングとか。みんな休養とか充電とか言いますが、僕は放牧と言っています。三〇代で一〇年間ぐらいメディアに出なかつたとき、トロピカルに興味を持ち、極めたいと思って一人旅に出たこともあります。

**田村** 南太平洋の島とかでしょうか。

**伊勢** 計画もなしにまずハワイに出かけ、最終的にはタヒチのボラ島まで行きました。そこで滞在したホテルの従業員と仲良くなり、ウクレレと一緒に弾いたり、サメにエサをやりに行ったりしました。今思えば、そうした経験がその後の音楽につながりましたね。

**田村** 確かにトロピカルな歌は多いですね。

**伊勢** ラテンのリズムが好きなんです。僕は演奏面では裏のリズムが好きだから、ギターを弾くス



トロークもこだわっていました。

**田村** 実は、大学三年生のときに伊勢さんを学園祭にお呼びし、楽屋番をやらせていただいたことがあります。

**伊勢** その学園祭のコンサートは覚えています。皆さんが聞きたい曲をほとんどやらなかった記憶がありますね……。

**田村** アルバム『北斗七星』が出た後でしたので、新しい曲ばかりでした。楽屋では二時間くらいぶっ続けてギターを練習されていて、すごいものだなと驚かされました。

**伊勢** 当時はたぶん難しいことをやっていたし、サウンド志向に走ったところもありました。

**田村** 最近でも新曲のアルバムを出されたり、ファンとしては嬉しい限りです。

**伊勢** 流行り廃りにとらわれないように心がけています。恵まれていることに僕の場合は作品が残るので、とにかく納得するものを作ることを意識しています。何年かに一回はメッセージソングを出さなければと思っています。

**田村** フォークシンガーだから。

**伊勢** はい。アルバム『Reborn』に収録されている「風の日の少年」の「未熟な果実が雨にうたれても嵐の中でも落ちない……」という歌詞は自分でもよく書けたと思っています。人の琴線に触れるようなものって意識して作れるものではないので、まず自分の琴線に触れて、それを伝えたいと思っています。

**田村** 日銀審議委員としてもそうですね。自分が心底こうだと思ふことを発言しないと伝わらないと思います。

ところで、流行り廃りではない

ということでは、校歌も作っていないんじゃないですか。

**伊勢** 僕の母校の大分県津久見市立第一中学校と第二中学校が来春に統合する計画があり、その校歌の依頼を受けました。光栄で名誉なことでもあり、責任を感じます。すでに作らせていただいた小中学校では、生徒たちとも随分交流させてもらいました。

**田村** 嬉しいことですね。秋に出されるアルバム『STILL MORE』に収録されるみたいなので、楽しみにしています。

交流といえば、新型コロナウイルスの影響を受けたこの三年間は人とのつながりを再認識する期間だったように思いますが、伊勢さんにとってコロナ禍はどのようなものでしたか。

**伊勢** 過去のライブ音源のアーカイブを聴き直し、自分自身を見つめ直す良い機会でした。振り返ってみると、そのときにしかできないことをちゃんとやってきたんだなと確認でき、結局は、エネルギーに満ちてやりたいことをやればいんだ、という結論に至りましたね。

**田村** まだまだ新しい伊勢正三を

期待しています。

**伊勢** みんなそれぞれ持ち場があると思うんです。楽しいからやっているんだけども、そうは言ってもほほ苦しいです。これほど続けてきてもライブではいまだに緊張しますし……。いざ始まると解放感や幸福感を味わえるのですが、その境地に至るまではほほ苦しいです。楽をしていい目を見ることなんてあり得ないですから。みんなどこかできっちり努力して、それぞれの仕事をやっているんだと思います。

**田村** まさに、「終りのない唄」(注⑥)の世界そのものですね。コンサートに行くと、同世代や少し上の人たちが本当にニコニコしていて、元気が湧いてきます。本日はお会いできて光栄でした。

(注⑤) クラウド／ユーザーがアプリケーションやストレージなどのコンピュータ資源を、インターネットを介して利用する仕組みのこと。

(注⑥) 終りのない唄／伊勢正三作詞・作曲。一九七六年の「風」のアルバム『時は流れて……』に収録。「唄うことがとても苦しいものだと思った。それでも僕は唄ってゆきたい。誰かが聞いてくれる限り」と歌う。